

# 万吉だより

MA GECHI NEWS

第7号 平成20(2008)年1月

## 熊谷博物館の環境

館長 池上 悟

大学博物館の所在する熊谷市は、埼玉県北部に位置している。昭和41年に短期大学を移設し、翌年には教養部が開設された。以後40年を経過し、現在は社会福祉学部・法学部・地球環境科学部の3学部の開設地となっている。

大学博物館は、平成14年に開設されて以来6年間が経過しようとしている。主要な所蔵資料は、熊谷校地開設とほぼ同時に実施されたネパールのティラウラコット遺跡出土遺物、長年にわたり文学部考古学研究室が埼玉県各地で調査してきた古代窯業関連遺物、昭和53年以来継続している熊谷校地内遺跡からの出土品、本学OBの吉田格氏寄贈の縄文文化資料、眞鍋孝志氏寄贈の梵鐘資料などであり、新たに三宅敏之氏の経塚関連資料、江坂輝弥氏の縄文文化関連資料の寄贈があり、順次資料の充実が図られている。

しかしながら博物館所蔵資料の現状は、考古関連資料に重点が置かれている点は顕著であり、ようやく総合博物館を目指す大学博物館の基礎がなった段階である。

平成19年度の第4回企画展として、「立正大学のあゆみ」を開催した。古く天正8(1580)年の飯高檀林に起源し、旧制大学としての歴史を誇る本学のあゆみを在学生に周知し、誇りをもって4年間を過ごしてもらいたいという企画で開催したものである。

しかしながら、大学への愛着は単一の企画で徹底されるものではない。在学生の入学の動機はさまざまであり、在学中の授業・課外活動などを通じて醸成されていくところと思慮される。恒常的に大学の歴史を周知徹底するためには、博物館の重要部門として「大学史」部門を設け、関連資料を収集・保管して活用すべきと考えられる。

この「立正大学のあゆみ」展では、新たに大崎校舎における「移動展」を実施した。2校地制が明確となった熊谷3学部、大崎5学部の現状に対応した企画であり、双方の在学生の数を勘案すれば今後も継続すべきであろう。

博物館における総合化は「大学史」部門のみではなく、大学の歴史を考慮すれば仏教文化関連分野であり、海外調査の盛んな地球環境を考慮した地理学的分野もまた充実すべき重要部門と考えられる。大学博物館の、将来の総合化の目標としたい。

## 第 4 回企画展 「立正大学のあゆみ」

内田 勇樹

平成 19 年 7 月 2 日 (月) から 7 月 29 日 (日) まで第 4 回企画展「立正大学のあゆみ」を開催しました。

立正大学は、その淵源を飯高檀林 (現千葉県匝瑳市飯高) に求めることができます。飯高檀林は日蓮宗の学問所として天正 8 (1580) 年に創設され、以降明治 8 (1875) 年に廃止となるまでの 295 年間、諸檀林の最高所として多くの学僧を世に送り出してきました。

日蓮宗では、明治 5 (1872) 年に従来の諸檀林廃止を決定し、東京の芝・二本榎の承教寺 (現東京都港区高輪) に日蓮宗小教院 (のちに宗教院と改称) を設置し、諸宗に先駆け一宗独立の教育機関を創設しました。この明治 5 年をもって立正大学の創立とし、現在 135 周年を迎えています。その後、明治 37 (1904) 年、品川東大崎の地に 3,000 余坪の土地を購入し、日蓮宗大学林として新たな出発を迎えます。そして、大正 13 (1924) 年 5 月 17 日、大学令に依る「立正大学」の認可がおり、同時に財団法人立正大学・同学則も認可され、これにより、専門学校令による日蓮宗僧侶の教育機関であった大学から一般学生も受け入れるようになりました。この時の組織は、研究科・学部・予科の 3 科に分け、学部を宗教学・哲学・社会学・史学・文学の 5 科とし、修学年限を予科 3 年、研究科・学部は 3 年以上としました。また、翌 14 (1925) 年には旧日蓮宗大学を立正大学専門部とする認可を受け、宗教科・国語漢文科・歴史地理科の 3 科を修学年限 3 年として設置しました。

こうして、「立正大学」として新たな発足をし、近代教育が行われていくようになりました。

大正 13 年に「立正大学」として新たな出発を果たしましたが、時代は太平洋戦争へと動き、講

立正大学博物館 第4回企画展

# 立正大学のあゆみ

平成19年  
7月2日(月)~7月29日(日)

開館時間: 10時~16時 入館料: 無料

休館日: 火・日・祝日、大学休業日  
※7月29日(日)の最終日はオープン  
キャンパスの為閉館します。

場 所: 立正大学博物館1F

お問い合わせ  
〒300-0194 埼玉県蕨市万吉  
TEL: 048-536-6150 / Fax: 048-536-6151  
Email: museum@ris.ac.jp  
URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/>

### 第 4 回企画展チラシ

義の中にも“軍事教練”として、大正 14 年より中等程度以上の男子学校に、陸軍現役将校を配属して軍事に関する訓練も入れられようになりました。その後、戦局が厳しくなると立正大学の学生も横河電機・赤羽兵器廠・立川飛行場・月島軍需工場等に動員されました。

昭和 18 年 9 月、東条内閣は理科系・教員養成系以外の大学・高専在学生の徴兵猶予を停止 (10 月公布)、10 月 21 日には明治神宮外苑競技場で本学学生を含む出陣学徒壮行会が行われました。

昭和 20 年 8 月 15 日、終戦をむかえると、経済状況の不安定の中、昭和 24 年には新制立正大学の設置認可を受け、仏教学部 (宗学科・仏教学科)・文学部 (哲学科・史学科・国文学科・社会学科) を設置しました。翌年、文学部英文学科を増設、経済学部を設置し、12 月大学令の廃止によって旧制立正大学文学部が廃止になりました。昭和 26 年 2 月には財団法人立正大学を改め、学校法人立正大学学園 (立正大学・同短期大学部・立正高等学校・立正中学校経営) として組織変更

の認可を受けました。

また、3月には専門学校令の廃止にともない立正大学専門部を廃止し、そして4月に立正大学大学院文学研究科修士課程設置の認可を受け、総合大学への一步を踏み出しました。

昭和30年代後半になると、第1次ベビーブームや進学率上昇などで大崎校舎だけでは手狭になるほど学生数が増加し、新たに熊谷校舎の建設が始まりました。昭和40年1月から第1期工事が始まり、第3期工事を経て昭和41年に短期大学部商経科が移設され、昭和42年4月に熊谷校舎において第1回入学式が行われ、立正大学の新たなキャンパスがスタートしました。

現在立正大学は135周年を迎え、大崎・熊谷とも4年間一貫教育になりました。熊谷キャンパスの再開発事業が始まり、大崎キャンパスも順次施設の増改築が進み、新たな転換期を迎えています。

8学部14学科7研究科からなる総合大学へと発展し、様々な分野で活躍する人材を輩出しています。

展示では、

- 1、建学期
- 2、日蓮宗大学林時代
- 3、旧制立正大学時代
- 4、新制立正大学時代
- 5、現在の立正大学



安中尚史氏による講演会の様子

の5つのコーナー展示を行い、卒業アルバムや写真を使って展示を行いました。また、立正大学の総合大学を目指し、大学発展に大きく関与された石橋湛山先生（立正大学第16代学長）にスポットを当て、紹介しました。

そして、企画展示関連事業として、講演会を7月21日（土）に立正大学熊谷校舎1号館3階第1会議室にて行いました。講師に安中尚史氏（仏教学部准教授）を迎え、「立正大学の淵源を求めて」と題して講演を行って頂きました。

日蓮宗の教育・研究機関として設立された飯高檀林から明治5（1872）年に芝・二本榎承教寺に移され、近代的な教育機関へと発展していく立正大学の過程を分かりやすくご講演頂きました。

また、新たな試みとして大崎校舎移動展を今回の企画展から開催いたしました。これは、立正大学の四年一貫教育政策のもと大崎校舎には「仏教・文・経営・経済・心理学部」の5学部が、熊谷校舎には「社会福祉・法学・地球環境科学部」の3学部が設置されることとなり、熊谷校舎に来る機会が少ない大崎校舎の在学学生に展示内容を見てもらうことを目的として開催したものです。

展示は大崎校舎5号館1階フロアの壁面ギャラリースペースを使用し、パネルのみの展示を行いました。

今後も企画展・特別展の開催の際には、大崎校舎の移動展示を行う予定でおります。

（立正大学博物館学芸員）



大崎校舎5号館1階における移動展示の様子

## 展示資料の背景 (7)

### 撫石庵コレクション

内田 勇樹

立正大学博物館の重要な資料の一つとして、世界各国の鐘などがある。これは、眞鍋孝志氏（日本古鐘研究会会長）より寄贈を受けたもので、“撫石庵コレクション”として展示されている。

撫石庵コレクションは、平成12（2000）年・平成13（2001）年に立正大学学園に寄贈され、その後立正大学博物館の開設をもって博物館所蔵となったものである。主に釣鐘を中心としたコレクションであるが、鯛口・鉦鼓・銅鑼・金鼓・伏鉦などの梵音具や、小金銅仏像なども含まれており内容は多岐にわたっている。

今回は、その展示品について紹介する。

博物館に入るとまず目にするのが、ひときわ大きい梵鐘である。これは長徳寺鐘と呼ばれるもので、全高123.9cm、口径67.9cmを測る。青銅製で、緑がかった淡黒褐色の色調をしている。梵鐘は、「龍頭」・「笠形」・「鐘身」と大きく分けられ、「鐘身」には「紐」と呼ばれる突起した線で縦横に区画される「袈裟襷」と呼ばれる文様が施されている。この袈裟襷で区画された部分は、上から乳の間・池の間・草の間に分けられ、乳の間には「乳」と呼ばれる突起物が施され、池の間には梵鐘の製作目的などが鑄刻された銘文が刻まれ、草の間には唐草文などの装飾が施される。

長徳寺鐘の銘文中に「仙台大西五郎治嫡子／大西五郎八貞清作」と鑄物師の名が見られる。大西



写真1 タイ・ミャンマー・中国などの鐘

五郎八貞清は、宮城県仙台を中心に活躍していた鑄物師である。

入口からエントランスに向かうと、ミャンマー・タイ・スリランカ・中国などの鐘が展示されている（写真1）。

また、第1展示室の西側スペースには、撫石庵コレクションの重要な資料として、伝樞原市出土鐘がある（写真2）。



写真2 伝樞原市出土鐘

この鐘は、大きさ46.1cm（遺存高）、口径30.2cmを測る平安時代前期頃に製作されたと推定される青銅製の梵鐘である。鐘身の半分がつぶれ、残り半分もその影響を受けて若干歪んでいる。龍頭を欠損しており、銘文も刻まれていない。この伝樞原市出土鐘を平成18年11月に復元したものが、隣に展示されている。撞き座部分は、型をおこして作り、他は実測図から復元したものである。

そして、もう一つ目をひくものがタイの銅鼓である（写真3）。これは、総高47.6cm、鼓面径64.6cm、厚み約2.0mmを測り、材質は青銅であり緑がかった空色の色調を呈している。銅鼓は、青銅で作られた片面の太鼓で、主に雨乞いや祖先祭祀の際、精霊に働きかける目的で使用されたものである。中国南部から東南アジア地域にかけて分布する伝統的楽器で、本製品は11世紀以降の年代と考えられる。





写真3 銅鼓(タイ)

この他に第1展示室内の平ケース内には、掛け仏、馬鐸、鉦鼓、金鼓が展示されている。金鼓は、大きさ、総高10.2cm、口径39.8cm、最大径40.2cm、厚み5.0mmを測り、緑がかった空色を呈する青銅製のものである。口唇部底面に「鑄成鉦子一座懸排大興郊北禪寺」「貞祐陸年戊寅七月 日」と銘文が鑄刻されている。「鉦子」は金鼓の別名で、他に禁口・盤子・子・半子・般子などがみられる。また、「大興」は現在の朝鮮民主主義人民共和国の咸興の西側付近に位置する場所にあり、その近郊の北禪寺に寄進されたものと思われる。「貞祐陸年」は1218年にあたり高麗時代のものである。

また同じく第1展示室縦ケース内に展示されている作品についてみると、まず3体の小金銅仏が目につく(写真4)。これは、左から金銅如来坐像(中国)・金銅釈迦如来立像(中国・東魏・武定七(549)年)・金銅如来三尊像(中国)である。なかでも中央の金銅釈迦如来立像は台座部分に銘文が、正面向かって左側面に「武定七年六月十七日弟子孫貴□□母」、背面に「李□□興家四海屈□□大小并凡一切法界」、右側面に「衆生一時成仏」と鑄刻されている。この仏像は北魏様式か



写真4 小金銅仏(中国)

(左から金銅如来坐像、金銅釈迦如来立像、金銅如来三尊像)

ら北齊様式に変わる移行期の作風である。

次に見られるのが、甬鐘である。これは中国・殷時代末に祖霊を祭る礼器として造られた、横断面が杏仁形を呈するのが特徴の青銅打鳴器「鐘」から変化したもので、鐘頂の上に立つ把手状の「甬」をその特徴とみだててこの名称があり、周代にこの形になったとされている。また、鐘身には「枚」と呼ばれる突起物があり、この枚が後世の梵鐘の「乳」に繋がると考えられている。

博物館に展示されている甬鐘は周代でも中ごろの作品と考えられるものである。



写真5 甬鐘(中国)

その他にこの縦ケース内には、中国・朝鮮・和韓混合鐘・ベルなど様々な鐘が並んでいる。

展示室には、これらの他に江戸時代の半鐘やタイの銅鑼が展示されている。

世界各国の梵鐘を中心とした撫石庵コレクションは、貴重なコレクションを初めとして、様々な鐘を一同に見られるコレクションである。

(立正大学博物館学芸員)

## NEWS

## 博物館実習

平成 18 年度博物館実習を以下の日程で行いました。

・期 間：

第 1 回平成 19 年 7 月 30 日(月)～8 月 4 日(土)

第 2 回平成 19 年 9 月 10 日(月)～9 月 15 日(土)

・場 所：立正大学博物館

・実習生：20 名

文学部哲学科 3 名、文学部史学科 7 名、文学部  
文学科 1 名、地球環境科学部環境システム学科  
5 名、地球環境科学部地理学科 4 名

・内容：展示資料の資料台帳作り、写真の講義や  
キャプション作りなどを行いました。また、自然  
史関係実習として島津弘氏（第 1 回目・地球環  
境科学部教授）・菊地隆男氏（第 2 回目・地球環  
境科学部教授）に、また文化史関係の講義として  
第 1 回目に高橋一夫氏（元埼玉県立博物館館長）、  
第 2 回目に米谷博氏（千葉県立中央博物館大利根  
分館上席研究員）をお招きして講義を行って頂き  
ました。

高橋一夫氏には「公立博物館の取巻く状況」と  
題して以下の項目について講演して頂きました。

1 博物館の再整備

2 再整備に関する県民の声

3 博物館の再生をめざして取り組んだこと

4 指定管理者制度の導入

5 目標による博物館運営

6 大量退職時代と博物館運営

最後に一学芸員をめざす皆さんへ

講演内容について大略すると、現在、博物館の  
あり方についてその方向性に大きな転換期を迎え  
ています。埼玉県の博物館もその中で再整備が行  
われています。埼玉県の県立博物館は、それぞれ  
埼玉県立歴史と民俗の博物館（埼玉県立博物館＋  
埼玉県立民俗文化センター）、埼玉県立史跡の博  
物館（埼玉県立さきたま資料館＋埼玉県立歴史資  
料館）、埼玉県立自然と川の博物館（埼玉県立自  
然史博物館＋埼玉県立川の博物館）にそれぞれ統  
合されています。この再整備にあたって県民の意  
見を聞いたところ、反対意見はほとんど無かった

ことがあげられます。これはそれまでの博物館活  
動が地域に根ざす活動を行わなかった結果である  
と言えます。こういった点を踏まえて再整備にあ  
たって、

1. お客様重視の視点、2. 地域との連携、3. 苦  
情の早期解決、4. 誰にもやさしい博物館づくり、  
5. ボランティアの導入、6. 友の会の設立、7.  
予算が無くても事業を実施、8. 地域の実情にあ  
った館運営、9. 協議会の改革、10. 博物館評価  
の導入、11. 資料管理の徹底指定  
について取り組んで来ました。

また、指定管理者制度の問題や大量退職者時代  
を迎えるにあたっての問題点などについて、公立  
博物館の抱える問題点を、埼玉県立博物館（現埼  
玉県立歴史と民俗の博物館）館長の経験から通し  
て講演して頂きました。

米谷博氏には「歴史系博物館と学芸員」と題し  
て以下の項目について講演して頂きました。

はじめに～自己紹介と千葉県の博物館

1 博物館活動

2 博物館の運営方針

3 博物館の評価～良い博物館とは？

おわりに

現在、千葉県立中央博物館大利根分館の学芸員  
である現職の立場から博物館業務に関することを  
中心にこれからの博物館についての評価と問題点  
について講演して頂きました。

講演内容について大略すると、博物館活動とし  
て 1. 調査研究、2. 展示として、調査研究では  
博物館としての学芸員の活動と研究職の違い、学  
芸員の業績（研究と展示）などについて、展示で  
は展示に係わること（展示方法・展示に係わる業  
者・解説など）について話して頂きました。また、  
博物館の運営方針として、館の位置づけ・入館料・  
他団体との連携・利用者との関係の項目について  
話して頂きました。そして、博物館の評価では、  
評価の動き（経済情勢に伴う公立博物館の存在意  
義・私立博物館の運営危機など）について、評価  
項目（展示・集客・利用者・研究・費用と効果・  
自己評価と第三者評価）について、問題点（数字  
による評価の限界・博物館側の消極性・単年評価  
の困難さ）について講演して頂きました。



高橋一夫氏による文化史関係講演の様子



米谷博氏による文化史関係講演の様子

来館者数

平成19年4月2日(月)～平成20年1月31日(木)

4月148人、5月157人、6月204人、7月305人、8月95人、9月43人、10月219人、11月291人、12月125人、1月43人  
計1,630人

来館者往来

[中学・高等学校]

群馬県下仁田高等学校・藤岡中央高等学校・伊勢崎高等学校・埼玉県東京成徳深谷高等学校・桶川西高等学校・与野高等学校・行田進修館高等学校・熊谷商業高等学校・本庄第一高等学校・川越初雁高等学校・茨城県総和高等学校・東京都立正中学校

[団体]

橘父兄会・立正高等学校父兄会・行田進修館高等学校父兄・東松山市中山ふれあいサロン・彩の国いきがい大学熊谷学園・熊谷市商工会

出版物

平成19年度上半期は、下記の刊行物を発行しました。

・『立正大学博物館年報』5(平成19年9月刊)

資料の貸出し

平成19年度上半期は、以下の資料の貸出を行いました。

・三鷹市教育委員会・調布市郷土博物館・明治大学校地内遺跡調査団

吉田格コレクション

西之台遺跡A・B地点出土石器4点

熊ノ郷遺跡出土石器2点

殿ヶ谷遺跡出土石器12点

平成19年8月8日(水)～12月20日(木)

・品川区立品川歴史館

吉田格コレクション

下沼部貝塚出土土器6点

赤塚城址貝塚出土土器2点

平成19年9月18日(火)～12月31日(月)

・宮代町郷土資料館

吉田格コレクション

称名寺貝塚出土土器2点

称名寺貝塚出土土器6×7フィルム2枚

平成19年9月28日(金)

～平成20年1月25日(金)

## 見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立させていきたいと思っております。

- ・大学内が遺跡であることを初めて知りました。  
(県内・本学学生・19歳女性)
- ・今回は2回目の来館で、第4回企画展「立正大学のあゆみ」を見に来ました。立正大学がどのような歴史を通して今に至っているのかが理解できて良かったです。  
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・イルカなどの骨が加工されて道具として使われていて驚いた。いろいろな展示物で勉強になりました。  
(県外・大学生・18歳男性)
- ・世界のいろいろな鐘があり、音も聞いてみたかったです。  
(県外・大学生・19歳男性)

- ・館の維持管理・展示等大変かと思いますが、頑張ってください。  
(県内・一般・30歳男性)
- ・キャンパス内の奥にあるのでわかりづらかったし、一般の人が入って良いのか戸惑いました。もっと案内を告知してほしいです。  
(県内・大学生・30歳女性)
- ・復元された梵鐘の音色が非常に素晴らしかったです。  
(県内・一般・40代女性)
- ・第4回企画展を見に来ました。大学の歴史が一同に紹介されており、コンパクトであるが分かりやすく展示されていました。  
(県外・一般・50代男性)

## 利用案内

所在地：〒360-0161  
埼玉県熊谷市万吉1700  
立正大学熊谷キャンパス内  
TEL 048-536-6150  
FAX 048-536-6170  
開館日：月・水・木・金・土曜日  
(大学休業中を除く)  
開館時間：10:00～16:00  
\*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)  
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。  
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

## あとがき

前号(『万吉だより』6号)で紹介した伝榎原市出土鐘復元品が、音を聞くと非常に心地よいですねと、一つの目玉になっています。ぜひ足をお運びのうえ鐘の音をお聞き下さい。また、第4回企画展では大学の歴史が学べた自分自身にとっても、勉強になる企画展でした。今後も大学博物館の特徴を活かした展示が出来るように努めていきたいと思っております。

(内田)

題字揮毫 田淵観斎(立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第7号  
平成20(2008)年1月26日発行  
編集・発行 立正大学博物館  
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700  
TEL 048-536-6150  
FAX 048-536-6170  
e-mail: museum@ris.ac.jp  
http://www.ris.ac.jp/museum/index